明治期における外国人保養地
《箱根》の成立

厚木高校　児玉祥一

1　はじめに

東海道の宿場そして関所がおかれた交通の要所でもある箱根は、一方で美しい自然と豊富な温泉に恵まれた温泉保養地として古くから人々を魅了し、多くの人々を迎えいれてきた。

江戸時代の末、鎖国体制に終止符がうたれ開国されると、ケンペルやシーボルトによってヨーロッパに紹介されていた箱根は、開港場「横浜」に近いこともあって、多くの外国人をも迎え入れることになった。そして現在にいたるまで国際観光地として広く世界に知られている。

本報告では、幕末から明治期に温泉保養地または避暑地として箱根を訪れた外国人の旅行記等を紹介するとともに、日本を訪れた外国人の宿泊施設である「ホテル」の日本における歴史、そして外国人保養地箱根の成立に関して大きな存在となった日本最古のリゾートホテルの一つ「箱根富士屋ホテル」について調べ、郷土「箱根」の教材化を図るてがかりとした。

2　外国人の見た箱根　リゾート（避暑地）箱根の発見

（1）開国前　箱根をヨーロッパに紹介した外国人

江戸幕府が創設されると、幕府は中央集権体制を強めるために、江戸を中心とした街道の整備に力を入れ、五街道をはじめ主要街道には宿場（宿駅）及び関所が設けられた。江戸と上方を結ぶ最も交通量の多い東海道にあって、箱根は険しい山越えとともに厳しい取り調べが行われる関所も置かれた要地であり、旅人にとっては道中きっての難所として有名であった。

幕府は寛永年間以来鎖国政策をとり続けたために、この難所を越えて行った外国人は多くはないが、彼らの中には箱根に大きな足跡を残すとともに、箱根の名を広く海外に知らしめた人々がいる。ここではその中で代表的な外国人ケンペルとツンベルグを紹介することとする。

①エンゲルベルト・ケンペル（一六五一～一七一六）
ドイツ人　医師　博物学者　旅行家

北ドイツのレムゴー出身のケンペルは、オランダ東インド会社の医師として一六九〇（元禄三）年に来日、オランダ商館長付きの医師として二年間にわたり長崎に滞在した。この間の一六九一・九二年には商館長の江戸参府に随行している。この時の見聞をもとにまとめた日本に関する著作が、彼の死後の一七二八年に『The History of Japan』と題されてイギリスで出版された。これが日本においては『日本誌』と訳されているものである。そして、この『The History of Japan』に収められた「江戸参府紀行」の中で箱根が初めてヨーロッパに紹介されることになる。

今井正氏訳『日本誌』の「江戸参府紀行」には、芦ノ湖について「ここにはいろいろな種類の魚がいるのだが、教えてもらったのは二つだけだった」と記されており鱒と姫鱒があげられている。植物についても「ハコネグサ（箱根草）」が紹介されている。また箱根宿については「ここには蝿もいないし蚊もいない。夏には

静養にもっとも適う土地だが、冬は空気が冷たく、重くかつ湿っぽいと」記し、箱根を避暑地・保養地として適していることを述べている。

なお、この『日本誌』の付録には、一八〇一（享和一）年オランダ通詞志筑忠雄が「鎖国論」と訳し、初めて日本に鎖国という言葉が生まれた論文が掲載されている。

②カール・ペータ・ツンベルグ（一七四三～一八二八）

スウェーデン人　医師　植物学者

スウェーデンのイエンチェピングに生まれ、ケンペルも学んだウプサラ大に入学。当時この大学には植物分類学を確立したカール・フォン・リンネが教鞭を執っていた。後にはリンネの業績を継承する植物学者として大学教授・学長を努めたツンベルグは、ケンペルと同じように東インド会社の医師として一七七五（安永四）年六月長崎の出島に来航する。約一年半の滞在の後オランダに戻るが、一七七六（安永五）年商館長に随行し江戸参府を果たしている。

ツンベルグは長崎付近と参府途中の東海道おもに箱根付近で、役人の制限と監視の下に植物採集にはげみ、日本の植物について多くの論文を発表した。特に一七八四（天明四）年に出版された『日本植物誌』には約八一二種の植物が記載されている。なかでも箱根を基準産地とする植物クロモジなど六四種を紹介している。

また、江戸参府の旅などをまとめた『ツンベルグ日本紀行』（一七九五～九六年刊行）ではハコネサンショウウオなど箱根の生物をはじめ箱根の漆器細工や湯本の温泉のことなども紹介している。

（2）開国後　箱根を訪れた外国人

一八五八（安政五）年「安政五カ国条約」が結ばれると、多くの外国人が日本にやってくるようになる。外国人は基本的には居留地と周辺の一〇里四方と定められた遊歩区域以外への立ち入りは禁止されていたものの区域外へでかけることを望む外国人は多く、幕府にとっても問題となっていた。駐日初代イギリス公使オールコックや二代目公使パークス、同国書記官アーネスト・サトウなどの公使・領事ら外交官は例外的に国内旅行を認められており、これを利用し富士山登山や箱根への逗留を企てたりもしていた。（詳しくは矢野慎一氏の報告、『神奈川県史』資料編10　近世（7）などを参照のこと）

明治時代を迎えると一般の外国人も「湯治」を理由に箱根と熱海への旅行が許可されるようになる。『神奈川県史』資料編15近代・現代（5）の「第三編　居留地および外国人取締、七　横浜居留外国人の箱根、熱海両温泉旅行免状交付方神奈川県へ委任一件」には【862】～【931】の「外国人湯治免状」に関する資料が残されている。中でも一八七八（明治一〇）年の県史【907】「九月一二日　神奈川県より外務省宛、箱根熱海両温泉行免状発行枚数（一月～九月）報告」ではその年の六月から八月にかけて二二五人のイギリス、アメリカ、フランス、ドイツを中心とする外国人に、一八七九（明治一一）年の県史【910】「七月一五日　神奈川県より外務省宛、箱根熱海両温泉行免状発行枚数（一月～六月）報告」では同じくこの年の一月から六月にかけて二〇一人のイギリス、アメリカを中心とする外国人に免状が発行されたことが分かる。

第　號

外国人湯治免状

国籍
姓名
身分
横濱番號
入浴期限

右ハ保養ノ為箱根熱海ノ温泉へ入浴イタシ度旨申立差許候条道筋無故障相通シ期限中ハ於湯治場モ止宿イタサセヘキ事

明治　年　月　日　**神奈川県廳**

此免状ハ横濱へ帰着ノ日ヨリ二日ノ内ニ県廳へ返納スヘシ

神奈川県『神奈川県史』資料編15近代・現代（5）P979「湯治免状」

外第五九〇号（朱書）

	米	英	仏	墺	白	丁	独	伊	蘭	秘	露	瑞典	西班	瑞西	清	葡	合計
一月																	
二月																	
三月																	
四月																	
五月																	
六月	九	拾弐	弐				参								弐		参拾参人
七月	廿七	廿七	拾弐	壱	壱		拾四	五	弐				参	壱	六	弐	壱百壱人
八月	廿五	四拾参	参	壱			九	壱	四					五			九拾壱人
九月																	

神奈川県『神奈川県史』資料編15近代・現代（5）P976【907】

やがて箱根を訪れる外国人たちは東海道沿いの箱根・畑宿・湯本地域からさらに宮之下をはじめ塔之沢・芦之湯・木賀などにも足を踏み入れていく。

この経過については箱根町立郷土資料館の『外国人の見たＨａｋｏｎｅ』（一九九七年）に詳しい。

例えば、一八六七（慶応三）年、世界一周の途上に日本を訪れ宮之下で1泊したフランスのボーヴォワール伯爵の一八七五年に刊行した著『Voyage Autour du Monde』（抄訳 綾部友治郎訳『ジャポン一八六七年』）から宮之下が「日本の貴族階級のバーデン・バーデンで、寒い季節には人気がなく、夏には浴客で一杯になる…」と記され、「開け放しの、きれいな細長い建物を二棟、蹄鉄型に結んだ造り」の茶屋に宿泊を希望したが得られず「もう一度階段を登り」「別のややお粗末な茶屋」に宿泊したことや、ここ宮之下での温泉場の様子に驚いたこと、日本人客との楽しい交流の様子などが記されていることを紹介している。そしてこの宮之下への道程について伯爵は「昨年はじめて、護衛に囲まれ、大君の書状を先に立てたヨーロッパ人の一行によって踏破された」と記していることも紹介している。

また、明治の初め頃の箱根の様子については、一八七〇（明治三）年七月発行の『The Far East』誌（第一号第三巻）に掲載された記事で紹介している。「多くの外国人が保養とレクリエーションを求めて、山中にある宮之下と堂ケ島を訪れ、彼らはそこの人々に大歓迎され、厚遇される。ホテル、あるいはお茶屋はとてもすばらしく、主人たちはできるかぎりの世話をしてくれるから外国人客は快適に過ごすことができる。大名やその家来らが常にここを占拠した時代

は去り今では外国人が贔屓賀にしてくれることを望み、それを大事にしていますと彼等は素直に言うのである…」。

明治初年頃に刊行されたといわれる横浜開港資料館編『F・ベアト幕末日本写真集』（一九八七年刊行）にも江戸時代より「箱根七湯」と称された宮之下など各温泉場の風景をも含む箱根各地の写真が掲載されており、解説シートには「箱根は、事実上、日本のバーデン・バーデンとなっている」、特に宮之下は「空気が澄んでいてさわやかである。…病む人もくたびれ果てた商人も旅人も、ここで気力と体力とを回復し、その美しい景観に心を慰める。誰もここ以上にすばらしい場所があろうなどとは思わない。」と保養地としてのすばらしさを指摘している。幕末から明治初期にかけて外国人保養地として宮之下が脚光をあびていたことがわかる。

そして明治中期に入ると一八八一（明治一四）年にイギリス公使館書記官サトウと同国海軍軍人ホーズによって刊行された初版『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』（『日本旅行案内　初版』横浜開講資料館蔵）、一八九一（明治二四）年にチェンバレンとメイソン編の三版『A Handbook for Travellers in Japan』（『日本旅行案内　三版』横浜開講資料館蔵）などの本格的な日本旅行ガイドブックも登場し、箱根のことが詳しく取りあげられ、箱根は国際的な観光地・保養地として知られることとなった。

『A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan』　一八八一年刊

宮之下　温泉で知られる　すばらしい保養地である

ルート：小田原から塔之澤まで人力車、そこから徒歩、駕籠を使えば横浜から一日で到着することができる。

旅　館：フジヤ（洋式の大きな建物、食堂やビリヤードがある）、ナラヤ(魅力的な日本式の建物。椅子やテーブル、ベッドなど洋式の品々が備わっている)

『A Handbook for Travellers in Japan』三版　一八九一年刊

宮之下　多くの理由から、とても快適な保養地である。清浄な空気、優れたホテルに加え、そこから長距離、短距離を問わずさまざまなおもしろい散策が楽しめる。またチェアーや特製の大きな駕籠に乗っていくのもいい。さらには、贅沢なお風呂もある。

ルート：国府津まで東海道線を利用し、そこから湯本までは馬車、鉄道、人力車に乗り、さらに宮之下までは人力車か徒歩で来れば、横浜から4時間半で来ることができる。途中に料金所がある。

旅　館：※※フジヤ ※ナラヤ(共に洋式の、大きなホテルである)

（注）※は優れた旅館に記された印

3　日本におけるホテルの形成

ここでは日本におけるホテルの形成について記していくこととしたい。日本におけるホテルの登場は「安政の五カ国条約」が結ばれ、来日する外国人のための宿泊施設が必要となり、一八六〇（万延一）年にオランダ人船長C・J・フフナーゲルが開港地横浜に「横浜ホテル」を開業したことに始まる。日本家屋を改造しビリヤード台と酒場を備えた小さなホテルであった。開港資料館編集の『改訂版横浜もののはじめ考』（二〇〇〇年発行）には、上海の英字新聞『ノース・チャイナ・ヘラルド』の一八六〇（万延一）年三月一〇

日号に「公衆の長い間の渇望に応えた」と記し掲載された横浜ホテルの開業広告（二月二四日付）の図版、『外国人住宅図』に描かれた横浜ホテルが載せられている。このホテルにはイギリス公使オールコックを始め、シーボルト父子、無政府主義者ミカエル・バークニンなどが宿泊したと記されている。

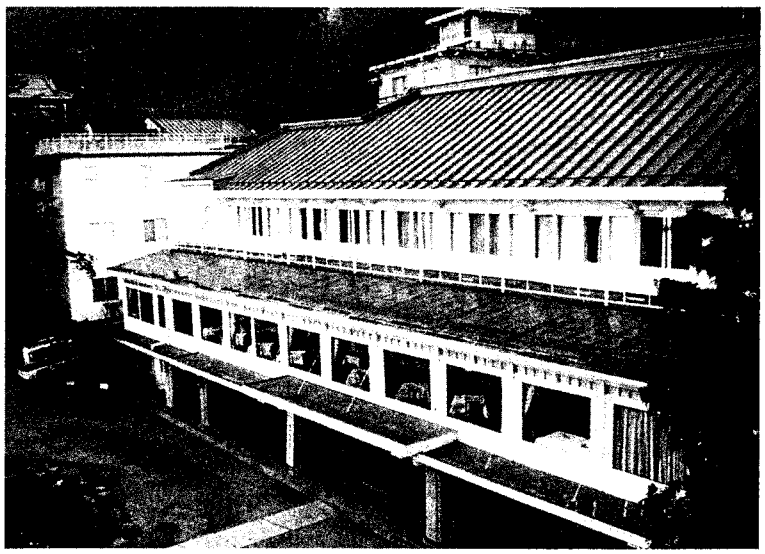
その後の十年の間に「ロイヤル・ブリティシュホテル、インターナショナル・ホテル、アングロ・サクソン・ホテル、グランド・ホテル、クラブ・ホテル」など横浜には40ほどのホテルが外国人の手によって開業さた。

一方で日本人によるホテル建設の第一号は、江戸から東京に改められた一八六八（明治元）年に東京築地にオープンした「築地ホテル館」である。イギリス公使パークスが江戸幕府に要望し建築されたホテルであったが、維新を迎えると明治新政府によって創業されることとなった。まさに日本が新しく生まれ変わる瞬間に誕生したホテルであった。

しかし、ここにあげたホテルはどれも現在ではすでに《失われたホテル》であり、今では写真・絵図でしか見ることができない。

現在も営業を続けている日本最古のホテルは「日光金谷ホテル」である。ヘボン式ローマ字の発案者ヘボン博士が一八七〇（明治三）年に日光を訪れた際、東照宮の楽職であった金谷善一郎に「日光廟の見学や東京・横浜の暑い夏を避けてやって来る外国人がこれから増えるであろうからそのための施設を造ったらどうだろう」と提案した。博士のこの助言により善一郎は自宅を改造し、金谷ホテルの前身となる「金谷カテージ・イン」が一八七三（明治六）年に誕生した。

一八九三（明治二六）年には現在の地に移り「日光金谷ホテル」として格式高いクラッシックホテルとして営業を続けている。なお、「金谷カテージ・イン」は今でも「侍屋敷（さむらいやしき）」として日光市本町に現存している。一八七八（明治一一）年に来日した英国女性探検家イザベラ・バードはカテージ・インに滞在した様子を『日本奥地紀行』（一八八〇年刊行）の第七信「日光　金谷家にて　六月一五日」のなかで「私が今滞在している家について、どう書いていいものやら私には分からない。これは美しい日本の田園風景である。家の内も外も、人の眼を楽しませてくれぬものは一つもない。宿屋の騒音で苦い目にあった後で、この静寂の中に、音楽的な水の音、鳥の鳴き声を聞くことは、ほんとうに心をすがすがしくさせる」と称賛している。その後ヘレン・ケラーやアインシュタインなどをはじめ多くの有名な外国人がこのホテルを訪れてる。



日光金谷ホテル本館　1893（明治26）年竣工

4　外国人ホテル―箱根富士屋ホテルの開業

多くの外国人が訪れるようになった箱根宮之下に、一八七八（明治一一）年「箱根富士屋ホテル」が開業されることになる。ここにホテル事業を興したのは山口仙之助という人物である。運輸省鉄道総局事務観光課編『日本ホテル略史』（一九四六年刊行）には「山口仙之助、箱根宮之下に五〇〇年の歴史を有する安藤勘右衛門経営の温泉旅館藤屋を買収して洋風に改造し、底倉区有温泉の使用権を獲得、富士屋ホテルと改称、外国人専門のホテルを開業す。当時パン、肉類の如きホテルの必要の食料品は凡て横浜より供給を受け、横浜・小田原間は馬車便、小田原・宮之下間は毎日早朝宮之下より人夫を派し運搬させ朝の食卓に供せり」と記されている。

富士屋ホテル株式会社『富士屋ホテル八十年史』（一九五八年）によると、山口仙之助は一八五一（嘉永四）年神奈川県橘樹郡の漢方医師大浪昌隨の五男に生まれ、十歳の時に横浜の遊郭「神風楼」の経営者山口粂蔵の養子となったと記されている。また、横浜出身の仙之助が箱根にホテルの建設を構想するにあたって大きな影響を与えた人物として福沢諭吉の名がある。仙之助は一八七一（明治四）年よりアメリカに渡り三年程皿洗いなどの労働に従事した後帰国し、慶応義塾に入学したこと、福沢に「お前の性質では今後學問を勉強するより、寧ろ實業界に投じて一旗擧げた方がよい」と仙之助が説諭されたことなどが記されている。そして、『日本ホテル略史』と同様に『富士屋ホテル八十年史』には一八七八（明治一〇）年「外人専門の旅館經營を志し理想の地を神奈川縣足柄下郡温泉村通稱宮之下と心に定め、敷地を物色し現場を視察…藤屋旅館（當時の主人安藤勘右衛門）を買収することに決し…」と述べられている。

ところで、福沢諭吉は箱根の塔之沢温泉「福住」にしばしば逗留している。そして、『神奈川県史』資料編14　近代・現代（4）の第二編「初期新聞抄」には、一八七三（明治六）年三月発行の足柄新聞第六号に「箱根道普請の相談」を寄稿したことが残されている。諭吉がこのころの箱根に強く関心をもち、箱根の発展には箱根湯本から塔之沢まで新道を建設するなどの交通整備の必要であることなどを温泉経営者そして時の足柄県令柏木忠俊らに強く訴えている。

諭吉が必要性を訴えた道路は、福住旅館の主人福住正兄などの尽力により、一八八〇（明治一三）年小田原・箱根湯本間、翌年には塔之沢までが開通している。そして、仙之助の手によって一八八七（明治二〇）年には宮之下までの道路も完成する。現在では国道一号線となっているこの道路は、工事費を賄うために通行料を徴収した日本最初の有料道路でもあった。

近代の箱根の発展に福沢諭吉の与えた影響は大きく、山口仙之助と富士屋ホテルの創設にも大きな示唆を与えていることがわかる。

さらに『富士屋ホテル八十年史』には仙之助がホテル火災の危険などを考え自家発電を早くから考えて実行したことが記されている。一八九一（明治二四）年「外人商館横濱バグネル・アンド・ヒル商會より45馬力の火力發電機」を買い入れたこと、一八九三（明治二六）年には維持費の問題で蛇骨川の水流を利用した水力発電に変え、さらに一九〇四（明治三七）年には「早川の水利権を得水量三十一個、落差百七十六尺、三百二十キロワットを以て宮之下水力電氣合資會社」を創設し、温泉、宮城野、仙石原などの村々にも電燈電力を供給したことが記されており、交通整備事業だけではなく、外国人客を迎え入れるためにさまざまな近代的事業を起こしていた

ことがわかる。

ホテルの建物に関しては、歴史的建造物でもある一八九一（明治二四）年に建てられた本館、一九〇六（明治三九）年に建てられた一号館（カミフィ・ロッジ）、二号館（レストフル・コテージ）などが明治時代の姿を残して現存しており、現在でも現役として活躍している。

なお、宮之下には現在営業も終わり取り壊されてしまったが「奈良屋」旅館という強力なライバルもあった。外国人客の争奪戦が激しくなり、一八九三（明治二六）年に「宿泊営業に関する契約」が奈良屋と結ばれ、富士屋は外国人専用、奈良屋は日本人専用という取り決めがされ、この協定は一九一二（大正一）年まで続けられたこと、富士屋は英語で奈良屋は日本語でしか広告を出してはいけないということまで取り決めがなされていたことも記されており、外国人リゾートホテルとして富士屋ホテルはその地位を築いていったのである。

最後になるが、富士屋ホテルの資料室におかれているホテルの宿帳からはアインシュタイン、チャップリン、孫文、ヘレン・ケラー、ジョン・レノンなどの有名な外国人の名前を発見することができることも付け加えておきたい。

5　おわりに

「神奈川における西洋文明との出会い」を共通テーマとして郷土の教材化の手がかりを箱根に求めたのがこの報告である。

ここでは幕末期からの来日外国人によって箱根が日本における外国人保養地・避暑地（リゾート）として発見されたことを明らかにした。また、その中で箱根におけるリゾート開発の中心になったのが近代建築遺産をもつクラッシクホテル「富士屋ホテル」であることもわかった。

今後はこの題材についての教材開発をさらにすすめ、授業での実践に取り組むことが必要であると考える。その際、現在営業しているホテルや旅館を授業の中でどのような形で取り上げていくことが望ましいのであるのかなどいくつか課題も残されている。また、今回調べた範囲（時代・地域）は小さく、遠足などの行事でも訪れる場所であることも考えると、箱根全体についてのフィールドワーク・調査などをさらに深めていく必要も感じており、今後さらなる研究を重ねていくこととしたい。

なお、本報告にあたり箱根町郷土資料館学芸員の鈴木康弘氏、箱根富士屋ホテルには、多忙中にもかかわらずご協力をいただいた。この場をかりて、御礼申し上げたい。

〈参考文献〉

箱根町郷土資料館『外国人たちの見たＨａｋｏｎｅ』一九九七年
横浜開港資料館『横浜もののはじめ考　改訂版』　二〇〇〇年
横浜開港資料館『Ｆ・ベアト幕末日本写真集』　一九八七年
神奈川県『神奈川県史』資料編10　近世（7）　一九七八年
神奈川県『神奈川県史』資料編14　近代・現代（4）　一九七六年
神奈川県『神奈川県史』資料編15　近代・現代（5）　一九七三年
小島豊著『箱根と外国人』かなしんブックス　一九九一年
加藤利之著『箱根山の近代交通』かなしんブックス　一九九五年
箱根温泉旅行協同組合『箱根温泉史』　一九八六年

富士屋ホテル株式会社『富士屋ホテル八十年史』　一九五八年
山口由美著『箱根富士屋ホテル物語』トラベルジャーナル社　一九九四年

箱根富士屋ホテル１号館（右）２号館（左）　1906（明治39）年竣工

箱根富士屋ホテル本館　1891（明治24）年竣工